

## 「時双紙」の記載形式と内容をめぐって

Comments on the Basic Forms and Contents  
of Description as Seen in the "TOKI-SOUSHI"

萩尾俊章

はじめに

沖縄県立博物館には、琉球王府時代に用いられたと伝えられる「時双紙」の写本が収蔵されている。「時双紙」は一葉あり、戦前中城村熱田の小橋川家に秘蔵されていたもので、それを鎌倉芳太郎が筆写した写本である。原本は戦災で失われたようであるが、写本として残されており非常に貴重である。

しかしながら、従来、この時双紙に関する研究はきわめて少なかつた。佐喜真興英はこの時双紙について内容の解釈を行った先駆者である。伊波普猷も若干は言及しているが、それらを除けば皆無に等しい。というのも、時双紙の記載事項は一部くずし文字で表記された部分はあるものの、大部分は簡略化された記号や象形的絵文字で表記された日撰の内容であり、解説に困難を伴っていたこと、また王府時代に廃棄されたために、それらの意味内容がはやくから失われたことともあって解釈が容易ではなかつたことが挙げられる。

本稿では、時双紙の中味がどのようなものであるのかを、史料の実態にしたがつて解説する。所蔵されている時双紙に関して、なるべくその記載形式や内容を記載にそくした形で紹介し、書誌的事項を含めて検討するものである。紙幅の都合で時双紙のすべてを解説できないので、不明な部分については別稿で資料紹介したい。

### 一 時双紙に関する研究小史

時双紙についてはいくつかの先行論文はあり、その中で歴史的位置づけや経緯、暦との関係で扱われている。重複する点もあるが、時双紙に関する歴史的記述や研究史を簡単に概括しておきたい。

時双紙に関しては、伊波普猷が紹介したことを嚆矢とする。伊波は「琉球に固有の文字ありしや」と題した論考で、時双紙を取り上げた。<sup>(1)</sup>『遺老説伝』にある「大荒之際未有文字時天人帶占書（時双紙）降下此世教之於民其文字數有一百余字後人遇惡日修造居室天人見之召占者曰今日大凶令

某人修室蓋屋何故答曰彼人不来間亦之何天人怒曰彼人愚而不知汝何不往告耶遂奪其書裂破而上天今所存者不過十干二支而已」を引用し、天人帶占書なる時双紙が存在したことを提示した。

また、新井白石の『南島志』には「國無文字俗相伝云昔有天人降而教人以文字其体如篆然（中略）美嘗觀于支字其體如古蒙古俗凡称也天人不係此地之人也未知其為何国字」とある。沖縄に文字が現れた伝説は、『遺老説伝』ならびに僧侶・袋中の『琉球神道記』にも記載されている。『中山伝信録』には元の時代に琉球が中国に通交した時の奉疏文は、木を列ねたものの上に科斗のような横文字を刻んだものだったという。

琉球固有の文字としては、十干十二支が遺つてているだけで、『琉球神道記』や伴信友『中外經緯伝』にはそれらの文字が掲載され、全部で十七文字ある。巫覡はこれを用いて日の吉凶や時の善惡を占つた。尚敬王時代の『僉議』には、「時よた（巫覡の事）之儀色々虚言を構人を申詫牛馬豚鳥挾殺させ段々造化ケ間敷儀而已致させ候故末々之者共及困窮候付雍正六申年一切被召止相背候者科定をも厳密に被仰定且時さうし迄も不残取揚燒廢被仰付置候」とある。時双紙はトキユタの経典であり、人心を惑わすものとみなされ、王府の指示により雍正六年（一七二八）にことごとく焼き棄てられた。

しかし、琉球王府によつて没収・焼却されたと考えられていた時双紙が伊波の時代に発見されている。折本の時双紙一冊で、北中城村熱田の小橋川家に旧蔵されていた。伊波が発見したのは大正四年十二月のことである。<sup>(2)</sup> 伊波は、記載の文字や平仮名、形象文字があるとして、その一部を列挙している。ただ、残念なことに、伊波の関心は琉球固有の文字に向かはれていて、その中味に関する記述は全く言及されていない。

佐喜真興英は時双紙に関心を示し、その内容について詳しく述べて研究者一人である。<sup>(3)</sup> 既述のように、中城村熱田の小橋川家に二冊所蔵されていて、その後北谷村桑江の与那城家と島尻郡真壁村の大家にも残部が見つかつたという。<sup>(4)</sup>

小橋川家所蔵の時双紙は縦八寸、横二寸五分の黒皮の折本であった。一方の表紙には△、他方の表紙には▽▽を朱書きされていた。丁数は二十四折、四十九枚ある。▽▽側の大部分は記号で記され、後に文字で書いたのがつけ加えられている。△側は雑然としていて、一枚から七枚までは記号が書かれ、八枚から二十一枚までは仮名文字入りの絵があり、二十一枚は仮名文字、二十五枚は絵、二十四枚から三十三枚まで仮名文字、三十四枚から三十七枚まで不可思議千万の記号で書かれている。三十八枚より四十枚まで▽側と同一の記号で書き記され、後は仮名で書かれ

て いる。

佐喜真によれば、『の記号は木、または甲乙のいずれかに相当し、△は水または壬癸のいずれかに相当すると考えた。また、・は火または丙丁のいずれかにあたるものという。二冊の時双紙は、』△側は時を占うのに用い、・』は時によつて占うのに用いられる。

佐喜真は「琉球の珍書『時双紙』」において、時双紙の『△』第二枚目の図を解釈し、これはトキが病氣の原因を見いだすのに用いた表と考えた。これら時双紙の解釈は示したもの、「この伝来系統はさっぱりわかりませぬ」とし、<sup>(5)</sup> その系統的な位置づけまでは至らなかつた。

戦後、時双紙に関する研究はいつたん途絶えたが、時双紙の写本の現存、宮古・八重山、さらには奄美地域の民間暦の採集、そして諸史料の発掘が進む中で、佐喜真が明らかにできなかつた点が徐々に解明されてきた。稻村賢敷は宮古の砂川双紙を考察する中で、砂川双紙には中世の陰陽道の暦注書『笠笠内伝』の影響があることを指摘した。<sup>(6)</sup> 稲村は砂川双紙詳細な内容検討と分類、『笠笠内伝』との比較検討はおこなつたが、残念ながら時双紙やその他の民間暦、暦注書との比較はおこなつていない。その後の研究の中で、中鉢良護の論文は注目に価するものである。<sup>(7)</sup> 琉球王府と王府周辺の暦の問題を読み解きつつ、時双紙についても一部日本の暦注書や大雑書、その他の琉球諸島の民

間暦との比較検討を試みており、大変刺激的な研究である。

以上、時双紙を直接的にあるいは間接的に言及した研究を概略したが、これらの成果をふまえた上で、以下、時双紙の記載と内容について考察をすすめたい。

## 二 記載の形式

沖縄県立博物館に所蔵されている時双紙は二冊ある。これは戦前中頭郡中城村字熱田の小橋川善安家に保管されていたものを、鎌倉芳太郎氏が書写したものである。原典は戦災で失われたが、この写本が遺された。戦後、博物館の日本本土における文化財収集において、鎌倉芳太郎から一九六一年三月に寄贈、譲渡されたものである。収集者である外間正幸は、時双紙と聞いて驚きをかくせなかつたといふ。博物館への受け入れは一九六一年五月十一日である。

時双紙の掲載の形式と内容について、佐喜真興英が報告した内容と比較校合しながら述べておきたい。

表紙にはそれぞれ△と・の記号が朱書き付されている。両者ともに和紙に墨書されるが、・側は部分的に朱書きがみえる。また、△側は各種の象形的な絵が描かれ、彩色が施されている。サイズは両者ほぼ同一で、縦二十四、二cm、横九、二cmである。・側に「所有主 中頭郡中城村字熱田 小橋川善安」と墨書きされる。また、左肩に

「(B本) 昭和二年四月二十日 A本ト校正了 (別冊参照)」と記されている。おそらくは書写した鎌倉芳太郎が校正するため記したものと考えられる。中にも「以下A本ト異る」、「Aナシ」などの脚注書きがみえる。ここでは、書き入れにしたがつて、»▽側をA本、・»側をB本としておきたい。

»▽側のA本は、雑然としていて、一枚から七枚までは記号が書かれ、八枚から二十一枚までは仮名文字入りの絵があり、二十二枚は仮名文字、二十三枚は絵、二十四枚から三十三枚まで仮名文字、三十四枚から三十七枚まで象形的な記号と干支記号で書かれている(例えば、時双紙A本②部分)。三十八枚より四十枚まで»▽側と同一の記号で書き記され(時双紙B本③参照)、後は仮名で書かれている。∴»側B本の大部分の一枚から四十枚までは記号で記され、四十二枚から四十九枚までは仮名文字で書かれたものが加えられている。佐喜真が調査した時双紙と比較校合すると、»▽側のA本が佐喜真本の・»本と、・»側のB本が»▽本と一致しており、表題と中味が入れ替わっていることになる。その一点を除けば、内容は一致していることに違いない。

この時双紙に関して、佐喜真是A本の»▽側は時によつて占うのに用い、B本の・»は時を占うのに用いられると考えた。<sup>(8)</sup>

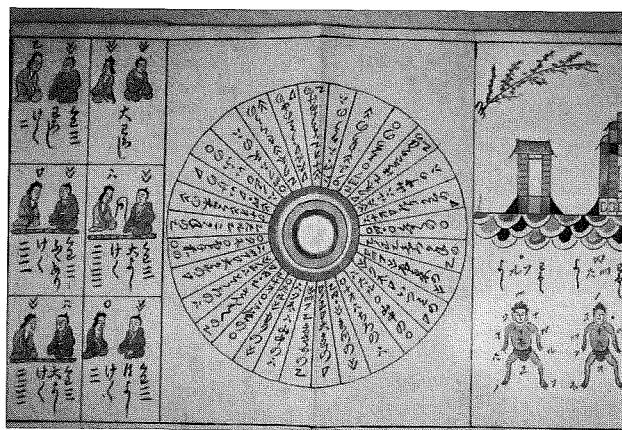
### 三 A本の記載内容について

佐喜真是時双紙にみえる独特的の記号について、その解釈をおこなつた。ここでは、それにしたがつて考察を進めておきたい。

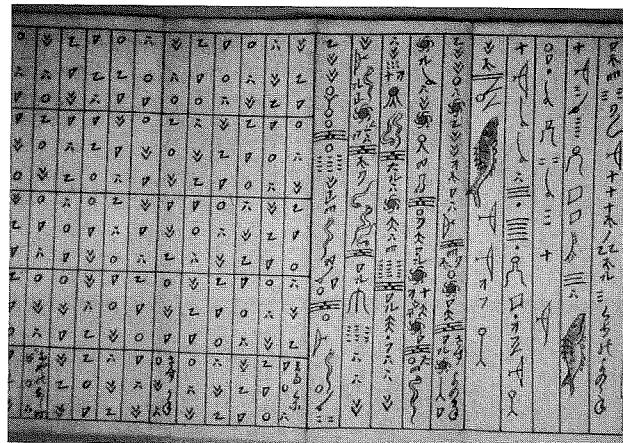
A本の記載内容から取り上げておくが、佐喜真がすでに指摘したように、A本はB本に比較して内容が不明なものが多い。

A本の一枚目から二枚目に關しては、佐喜真が田舎の占書に基づきながら、明確に解釈してみせている。しかし、佐喜真もその後の内容については不明としたものが多い。大方見当がついているのは、七枚目のB本にみられるような日取り表、十五から十六枚目の六十図(時双紙A本①参照)、十七枚目二十枚目には男女相生、二十の人の性による月日の運、二十七・二十八は性と仏の割り当て、二十九・三十は月もしくは時を内、外、門の三者に分けて占する方法、三十一・三十二は年の吉凶予言、そして四十一・四十二の屋敷相図である。<sup>(9)</sup>

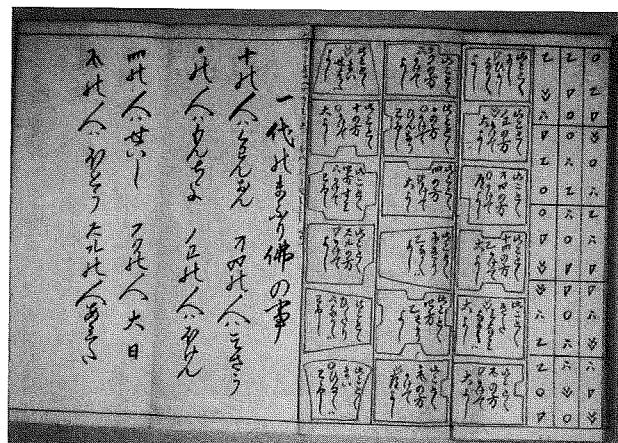
以上のうちで、六十図は佐喜真的時代にも用いられているものという。具体的にどのように利用するのかは不詳である。宮古の砂川双紙に干支文字による「六拾図」というのがあり、表形式で生まれ年の干支により五性決めるもの



時双紙A本①「六十図」〔15・16〕  
〔〕の数字は折帳の頁数を表わす)



時双紙A本②〔36～39〕



時双紙A本③「屋敷相図」〔40・41〕

一代のまぶり佛の事

子の人ハくわんおん

卯の人ハもんちよ

午の人ハせいし

酉の人ハふとう

未申の人ハ大日

戌亥の人ハあみだ

丑寅の人ハてさう

辰巳の人ハふけん

人の五性ニ馬のけあへ志やうの事

水性人ハ  
あしけ 吉

火性人  
くろけ

水性人ハ  
あふけ 吉

火性人  
かきくろけ

土性人ハ  
かわらけ 吉

金性人ハ  
かわらけ 吉

水性人あふけのわらけよし

四かのあく日

六月十四日十六日 十月十四日十六日

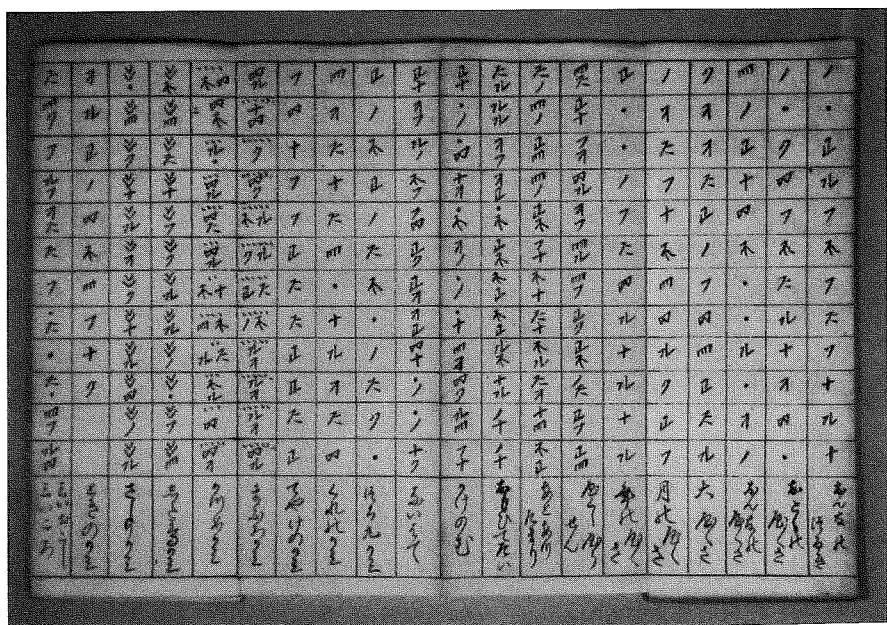
人のやまいみて 身かわりニ志する日

正月戌未申 二月申

三月戌

時 双 紙 A 本 ④

(原典にはないが、参考のために、下の算用数字は折帳の頁数を表示した)



時双紙B本③ [(74) ~ (93)]

([ ]) の中の数字は日撰の項目番号を表わす。折帳では16~19頁目にあたる)

字を配したもので、例えば「火（丙丁） 戊亥土（戊巳） 山

中の土（戊巳）」とあるように内容も異なり、関連は不明である。

また、男女相生は、五行による男女の性をみて、子どもの出生数、下男下女の数などで、榮と富を表すものである。この男女相生の図は類似のものが砂川双紙にも見いだせる。五行相生剋ということで、男女の相性を占している。これらの事項は『簠簋内伝』の記述や「大雜書」の「五性相生相剋の事」とも一致する点は中鉢が指摘している通りである。<sup>(10)</sup>

十三枚目から十四枚目にかけて、上部に祭殿・神殿図、下部に四人の人物図とそれに付随した頭、胸、腹、腕、手、股、足の部分に十二支の記号を示した図がある。これは「大雜書」の「四氣四皇帝うらなひ事」を簡略化したもののようにみうけられる。類似の図は砂川双紙にも摘要でき、日月図、天漢図、神殿及び神の座の図の次に、四人の人物が春、夏、秋、冬の四季に分けて記載される。沖縄県立図書館宮古分館の砂川双紙（咸豐五年）には「四季皇帝の御事」として皇帝図がみえる。沖縄県立博物館所蔵の砂川双紙（光緒二十七年）には皇帝の人物図があり、「四季皇帝之占」の簡単な注記みえる。いずれも簡略化された形式といえる。なお、時双紙の十一枚目から十二枚目の神殿・祭殿図は砂川双紙の神殿及び神の座と対応するとも考えられ

る。

A本にある四十枚目から四十一枚目の屋敷の形で吉凶を占う方法は、佐喜眞の時代にも用いられていたようである。『簠簋内伝』には「屋敷二十二相図」がある。<sup>(11)</sup> 完全には照合しないが、屋敷の形状を方位で占する点で同種のものである。

A本の屋敷図は全部で十八の形状の屋敷図が描かれる（時双紙A本③写真参照）。ただ、どのような理由によるものか不明であるが、一八〇度逆転した形で描かれている。というのも、四角形の屋敷形状から始まり、次は「此ごく辰巳の方かけて大よし」とあるが、屋敷図で実際に欠けているのは西北隅になっているからである。以下、丑寅が欠けている場合は西南隅、酉の方が欠けている場合は東側が欠けるという具合に一八〇度逆転して描かれている。

屋敷図の形状の描写にこのような点はあるものの、『簠簋内伝』の二十二相図と十四の屋敷図を照合することができない。『簠簋内伝』の東西増長、南北増長、東南不足、西南不足、西北不足、東北不足、東方不足、南方不足、西方不足、北方不足、前廣後狭、前狭後廣、右短左長、右長左短の形狀による十四の屋敷図が相当する。時双紙の残り四つの形狀「このことく子午の方かけて大よし」、「このことく四方さかりよし」、「このことく卯酉の方かけて後よし」、「このことく四方すみかけてわるし」は『簠簋内伝』

に見出せない。なお、吉凶の判断内容については両者で若干異なる。したがって、時双紙の屋敷相図は、『簾幕内伝』等の暦注をそつくりそのまま受容したものではなく、取捨選択され、実状に見合う形で編集された形跡がうかがえる。

四十二枚目以降は文字と干支文字による記載であるが、「一代のまふり佛の事」、「人の五性ニ馬のけあへしやうの事」、「四かのあく日」、「人のやまいみて身かわりに志する日」などが取り上げられる（時双紙A本④参照）。

#### 四 B本の記載内容について

B本の「」は時を占うことにして用いるというが、「」側B本の大部分の一枚から四十一枚までは記号で記されているが、その記号の一部を干支の文字に置き換えてみたものが時双紙B本①・②である。時双紙B本④が四十二枚から四十九枚までの仮名文字である。

B本はある事項やことがらをなそうとする時に、この表を参照して日取りをおこなうことになる。項目は一枚目の「大よし」、「後よし」、「屋づくりによし」、「くらつくりに大よし」から始まって、四十枚目の「すみもちろき」、「ひかしとふたから」、「なか手とふたから」、「不しとふたから」、「たもとから」、四十一枚目の「福德日」まで全部で一九九

項目がある。

例えば、家を建てる場合には、この表の(3)「屋づくりによし」をみて、六月であれば未丑辰の日が良い日となる。たてに六月から五月までの軸をとり、下の欄に各事項を記してある。ただ途中からは、各月単位ではなく、六七八月、九十一月、十二正二月、三四五月の振り分けになる。該当する箇所には十二支が一つあるいは複数（多い場合には六つ）が組み合わされて、日取りの目安となる。

下欄の各事項は不明なものが多いが、とりあえず全項目を列挙しておきたい。

1 大よし、 2 後よし、 3 屋作りに大よし、 4 くらつくりに大よし、 5 けくそ入大よし、 6 たけに御くわんたてふとき大よし、 7 てらに御くわんたてふとき大よし、 8 御きたうに大よし、 9 月のぬし、 10 あんしのさり、 11 けすのさり、 12 もとけす、 13 おやちれくわちれ、 14 る人たちへこふし、 15 ぬし一人、 16 月のひきしの、 17 よひころ、 18 いきあいころ、 19 月のてつりころ、 20 たけのふすもり、 21 もりのふすもり、 22 月のたん日、 23 年のたん日、 24 あへりやこふし、 25 なりこふし、 26 内おとろか、 27 外おとろか、 28 あたいの事、 29 天のふりあかし、 30 たかへなし、 31 たかへたうし、 32 天地のひ、 33 やうつうれ、 34 くらこつられ、 35 たてたらし、 36 もとやけまわり、 37 三十年やけまわり、 38 三月やけ

		丑 巳	丑 亥 巳 未	亥	未	未丑辰	丑 辰 未 巳	酉亥卯	(六)
		巳亥未	巳亥申	申 卯	申 亥	巳亥申	巳 寅 未 申	申 亥	(七)
		未 巳	巳 子	卯	辰 午	申 寅 巳 卯	丑寅辰 巳 未	酉卯亥	(八)
		丑 子	丑 子	巳 子	戌	亥丑戌	戌 丑 辰 西	巳子卯	(九)
		卯 未	卯 未	巳 卯	巳 西	酉丑巳	酉未辰	巳卯申	(十)
		卯 辰	卯申辰	辰子卯	卯 子	卯 子	戌 亥 未 辰	卯 子	(十一)
		戌子亥 未 西	戌丑亥 未酉子	子	丑 子	子 丑 辰 未	戌亥子	丑 巳 酉 未	(十二)
		丑亥子	丑亥子	酉 巳	酉 卯	酉亥巳	午 亥 丑 子	酉 巳	(一)
		戌申子	子 戌	酉 丑	酉 丑	酉丑戌	巳戌子	酉丑未	(二)
		未寅子	丑寅子	午 未	子	子 寅 未 辰	辰寅申	未寅卯	(三)
		子戌未 酉 卯	未 丑	酉 未	巳未卯	卯 未 巳 申	申 巳	酉未卯	(四)
		申 丑 酉 巳	酉丑巳	酉 已	巳 西	巳 西	申丑辰	酉 巳	(五)
(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
		てらに御くわん たて不とき大よし	たけに御くわん たて不とき大よし	けくそ入大よし	くらつくりに大よし	屋つくりによし	後よし	大よし	

表一1 時 双 紙 B 本 ①  
(右端の漢数字は月を例示した。下の算用数字は日撰の項目番号を示す)

表—2 時 双 紙 B 本 ②

人のうまれ月よしわるし		
正月 男よし	一月 男よし	三月 男よし
女わるし	女わるし	女ひんなり
四月 男よし	五月 男いのち長	六月 男よし
女よし	女ひんなり	女わるし
七月 男ひんなり 女よしなり	八月 男よし 女わるし	九月 男よし 女わるし
十月 男よし 女わるし	十一月 男よし 女わるし	十二月 男よし方位有 女わるし
人の生まれ日の事		
一日いのち長	二日よし	三日四日わるし
五日はあすなり	六日わるし	七日八日九日十日大よし
十一日ハめいくらなり	十二日十三日十四日大よし	十五日十六日ハわるし
十七日へのすと人なり	十八日十九日わるし	
廿日廿一日廿二日よし	廿五日ハやまい物なり	
廿七日廿八日廿九日二十日ハ吉		
大つちハ金午より七日なり八日ハま月五九日より		
七日小つちなり候		
大つちハ男七つ女ハ十一□□		
小つちハ男十八女ハ七つ□□		
春 正月 大つち木(甲乙) 申より金(庚辛) 寅まで 一七日		
三月 小つち水(壬癸) 邸卯辰より土(戊己) 戌まで 一七日		
夏 四月 大つち金(庚辛) 子より火(丙丁) 午まで 一七日		
五月 小つち火(丙丁) 未より火(丙丁) 未まで 一七日		
六月 小つち土(戊己) 申より木(甲乙) 寅まで 一七日		
秋 七月 大つち木(甲乙) 寅より金(庚辛) 未まで 一七日		
九月 小つち水(壬癸) 戌より火(丙丁) 子まで 一七日		
冬 十月 大つち金(庚辛) 午より火(丙丁) 未まで 一七日		
十一月 小つち火(丙丁) 丑より木(甲乙) 申まで 一七日		
右ちい出ニミ置の事		
49	48	47
		46
		45
		44
		43
		42

表—3 時 双 紙 B 本 ④

まわり、39ぬしおむ、40わきおむ、41きんたし大よし、42  
たしちら、43よのさん、44ひきかぶり、45はるせまき、46  
のりくた、47かいくた、48かせたらす、49へんふう日、50  
月のまる、51うちやり、52大かみ、53さすのかみ、54天な  
かへかわ志は志内のあく、55あかみつてたか志ろみつくる  
みつ、56もんかふうか人、57いきかけ、58いきみつ、59た  
ちかいり、60のきあて、61けりくし、62はてとまり、63も  
はかいし、64ゑんのおしなし、65ひのおしなし、66いけふ  
け、67はろきはねかいし、68かいりひさ、69かいりつみ、  
70おかしひつけ、71へんのひきつけ、72おやむけれくわむ  
けれ、73おとくのつるくさ、74おんなのつるくさ、75おと  
くのやくさ、76おんなのやくさ、77大やくさ、78月のやく  
さ、79年のやくさ、80やくしやらせん、81あとあつたまり、  
82おもひてたい、83かけのむ、84るいはて、85つち丸かみ、  
86くれのかみ、87てやけのかみ、88まふろかみ、89かつめ  
かみ、90したてかみ、91さしりかみ、92ときのかみ、93み  
いおこしみいころ、94みいころみおこし、95けちおかくれ、  
96まちおかくれ、97たちおかくれ、98入のくれ、99きんの  
うらろし、100よかけうらわし、101百かなき、102くいなき、  
103あかきろかはたし、104くろきろかうは、105おけむけ、106  
としおとく、107あきはう、108とようのかみ、109てたかひゑ  
らひ、110月のひゑらひ、111七人のおとちやのひゑらひ、112  
五人のおとちやのひゑらひ、113うちその日さくりその日、

114ときのひゑらひ、115しやりのひゑらひ、116ふたかひゑら  
ひ、117こてかひゑらひ、118こてかみつ、119たつのみつ、120  
とらのみつ、121かくれかさ、122かくれのみ、123のふしかく  
とろまし、124らかかれみつるかれみつ、125わりあかし、126  
ふなはろき、127おれちふまち、128よまふしき、129とはりや、  
130うちかいし、131ゑのゐせころ、132ひのゐせころ、133ふろ  
やのつな、134ふろやとくまり、135うちくき、136さしくき、  
137とまりのあく、138くたりふね、139世のこしあて、140世の  
とて、141世かいり、142世さしり（Aさしり）、143世のつみ、  
144くにうちよせ、145くにふしき、146くにうち、147くにくろ  
か、148さいなこ、149さいふこ、150三月よのかみ、151大ちや  
くに、152ひこい、153うちしふひきし、154せけらんのき丸、  
155かねのき丸、156よこしま、157かいりふた、158までしまか  
うちやり、159とりまさりとりふるひ、160いつるみくさつな、  
161いきなふりいきこふし、162さきくらかあとくろか、163さ  
きやふりあとやふり、164るあかりえおとり、165ふみあかり  
ふみおとり、166のりあかりのりこふし、167大つな、168月の  
つな月の物、169年につな年の物、170とわけのき丸、171ひや  
くよりかこ、172ひのよりこ、173さかくらこふしすけたいこ  
ふし、174一日ふこり、175ゑのりまたす、176けくへつれ、177  
三月ひきしの、178かるいころ、179さつきもどうし、180月の  
そてふり、181はみつきはみはつり、182よはかぶるひ、183あ  
ふふき、184よみいやのいりめ、185きりから、186つみから、

187 おりから、188 志めとつけ、189 称めさせめき、190 天のめち  
のめ、191 天のすと、192 ちのすと、193 ひちもちろんき、194 すみ  
もちろんき、195 ひかしとふたから、196 なかねとふたから、197 ふしとふたから、198 たもとから、199 福徳日

これらの各項目及びその日取りと日本の暦注とのおおよその比較は、中鉢良護がおこなった。重複するので、要約にとどめるが、時双紙B本（中鉢が指称するところの佐喜真双紙）の項目は、日本の陰陽道の暦注書『籠籠内伝』、近世日本の「大雑書」系と共通な暦注、「大雑書」系と同一な暦注名称であるが日撰内容の異なるもの、時双紙独自の暦注、内容と位置づけが不詳な暦注の四つのタイプがあるとして理解した。中世日本の陰陽道の暦注の影響を受けているものの、移入の歴史的時間の過程で独自の暦注が生まれ、近世日本の「大雑書」系の暦注の影響と移入もみられると考えた。<sup>(12)</sup>

さて、時双紙にみられる日撰の事項で、他の沖縄の民間暦にかかるものも看取される。時双紙は事項により干支や十二支による日取りである。例えば、「月のぬし」は十二支による日取りで、正月から十二月まで順に、「卯辰巳午未申酉戌亥子丑寅」、「内おとろか」は干支による日取りで、五行の火と「卯戌、巳、申辰、未亥、子戌、寅、卯戌、卯申、卯戌、卯戌、酉戌、申辰」の組み合わせになつてい

る。これらの日取りの内のいくつかは、中鉢が紹介したようく、『南島雜話』の日取り、加計呂麻島のトキ双紙、奄美・笠利のトキ双紙などと、一致もしくは類似（名称は同じながら日取りは異なるものあり）しているものがある。<sup>(13)</sup>また、時双紙と波照間島で見出される日撰暦クリヨンは、日取りに関わる項目（「月のぬし」とヌスドゥル、「天地の日」とジンヌピン及びジンクワ、「内おとろか」とウツウドゥルギヤーほか）については大方の対応関係を見いだせる。<sup>(14)</sup>この関係は、稻村賢敷氏が先駆的な研究をおこなった宮古島の砂川双紙についてもいえる。砂川双紙にも「天火日」、「地火日」、「主倒日」などの日取りがある。「天火日」、「地火日」や「主倒日」の日取りは、各々時双紙と波照間島の日撰暦クリヨンの日取りと共通する。

末尾の、四十二枚目以降の仮名文字の箇所は「人のうまれ月よしわるし」、「人の生まれ日の事」などを表している。

### おわりに

時双紙A本とB本には、既述のように、陰陽道の暦書や近世日本の「大雑書」系の影響がみてとれるものが多い。しかしながら、時双紙には、とくにA本には独自と考えられる暦注も看取される。琉球諸島において流布した民間の日撰書や暦に関して、さらに詳細な比較研究も必要であろう。

沖縄県立博物館には、久米島の上江洲家文書が御当主の厚意で寄託されているが、その中には『撰擇記』と題される日取帳二冊、『玉匣記通書廣集』、さらには琉球国司憲書官による『大清咸豐四年選日通書』他通書関係七冊などが遺されている。また、同様に博物館に寄託されている吉濱家文書にも、『玉匣記萬年曆』や日撰書類が遺されている。

現在、久米島関係については科研費によるプロジェクトが進行中であるが、こうした成果をふまえつつ、様々な視点からの比較検討と分析が必要であろう。<sup>(15)</sup>

本稿では、時双紙A本の内容については、紙幅の都合ですべてを紹介できなかつたが、次号においてその内容を提示し、専門家の御教示を仰ぎたい。

### 【脚注】

- (1) 伊波普猷「古琉球」『伊波普猷全集』第一巻所収  
一四八〇一五二頁 一九七四年
- (2) 伊波普猷「古琉球の政治」『伊波普猷全集』第一巻  
所収四八一頁 一九七四年
- (3) 佐喜真興英「靈の島々」『女人政治考・靈の島々  
〈佐喜真興英全集〉』新泉社 一九八二年
- (4) 伊波普猷は小橋川家で一冊の時双紙を発見したという  
が、佐喜真は同家で二冊の時双紙を確認している。
- (5) 佐喜真興英「琉球の珍書『時双紙』『民族と歴史』
- (6) 稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川  
弘文館 一九五七年
- (7) 中鉢良護「王府の暦をめぐる諸問題」『沖縄文化』  
二十八一一一九九三年
- (8) 佐喜真興英「靈の島々」四一七頁
- (9) 同書、四一頁
- (10) 中鉢良護、前掲論文、六十三〇六十四頁
- (11) 「籠籠内伝」「神道大系 論説編十六 隕陽道」神道  
大系編纂会 一九八七年、七〇頁
- (12) 中鉢、同論文、六十四頁
- (13) 中鉢、同論文、六十四〇六十五頁
- (14) 萩尾俊章「波照間島の日撰暦クリヨンとその周辺」  
『波照間島総合調査報告書』一九九八年 沖縄県立博物  
館
- (15) 三浦國雄「リチャード・スマス著『通書の世界』  
解説」一五一〇一五四頁 凱風社 一九九八年